

ア
ウ
ト
リ
ー
チ

通信



第8号
2007年9月1日発行
年4回発行
神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

〒662-8505
西宮市岡田山 4-1
電話・FAX: 0798-51-8584

(アンサンブル)を演奏し、今回のコンサート最後の飾りました。このように、それぞれの楽器の音色や魅力を感じてもらえるようにとアウトリーチ履修生全員で考えた多彩なプログラムを展開していきました。

また、会場の子どもたちと一緒にアンサンブルを楽しみ曲も取り入れました。G・キングスレイ《バロックホウダウ》では手拍子や踊りで音楽に合わせて遊んでもらい、子どもたちが身につけた光る腕輪がほんのりと暗くなった会場できらきらと輝いて、雰囲気盛り立てていました。L・モーツアルト《おもちゃのシンフォニー》では、小銭入れや足踏みの音など身近なものや自分自身で出せる音を探してもらい、子どもたち数人にはステージに上がって一緒に演奏してもらいました。会場全体が様々な音に包まれ、

子どもたちの
コンサート・シリーズ

第十七回 セタコンサート



開場前からたくさんのお客様

七月七日(土)、本学講堂にて「子どものためのセタコンサート」(子どものためのコンサート・シリーズ第十七回)を開催いたしました(第一部・十一時〜、第二部十五時〜、来場者数九六五名)。



「音楽によるアウトリーチ」履修生(四回生)八名と賛助出演一名の計九名が出演。今回は、演奏者だけでなく会場の子どもたちも一緒に色々な音を鳴らして共に音楽で表現するということをテーマに、フルート、ヴァイオリン、ピアノ、歌によるソロ演奏やアンサンブル、会場の子どもたちも参加しての演奏など、多彩な内容でコンサートを盛り上げました(今中百合、井上香菜、中須賀真弓、杉原真弓、

山本佳苗・金月里紗(賛助出演)・ピアノ/東瑛子・ヴァイオリン/片岡朗子・フルート/奥田敏子・声楽)。
出演者全員による、下総院一/武鹿悦子《たなはたさま》のアカペラ演奏で開演すると、にぎやかだった客席が静まり、出演者たちの歌声が会場内に響き渡りました。その後、織姫と彦星のストーリーを織り交ぜながら、W・A・モーツアルト《デイヴェルテイメント》、大きなお月様をバックに、石黒晶/まどみちお《つきのひかり》(声楽)、織姫と彦星の仲のよい様子をE・エルガー《愛の挨拶》(ヴァイオリン)で表現しました。そして、遊んでばかりいる二人に対して怒った神様の様子をC・サン・サーンス《死の舞踏》(ピアノ・デュオ)で力強く演奏。その迫力はお客様にもよく伝わったように思いました。そして最後に、R・ラヴランド/B・グラハム《あなたが力づけてくれるから You Raise Me Up》



《おもちゃのシンフォニー》

それぞれが自分たちの出している音を曲と共に楽しんでる様子でした。終演後はおなじみの楽器体験コーナーです。コンサートで使った楽器（フルート、ヴァイオリン、ピアノ、チェレスタ、トーンチャイム）を実際に体験してもらいました。子どもたちは、楽器から音が出た瞬間その音にびっくりしたり、コンサートで歌った《きらきら星》を弾いてみたりと、楽しそうに目を輝かせていました。また、そんな子どもたちを見てみると、私たちも音との出会いの大切さを改めて感じました。



フルートを吹いてみよう！

お客様からは、「演奏者の心が伝わる素敵なおとときだった」「七夕のお話に合わせた選曲で想像がふくらみ、よかった」「音楽、コンサートの楽しみ方を子どもたちに教えるいい機会となった」といった嬉しいお言葉の他、「もつとたくさんのお曲を聴きたい」

「もう少し子ども向きのお曲も聴きたい」など、今後の活動への参考となるご意見もいただきました。子どもは、その場その場でストレートに反応してくれるので、その反応を確かめながらプログラムを進めていくというのは貴重な経験になりました。また、聴きに来てくれた子どもたちが「すごく楽しかった！」と笑顔で言ってくれたことが何より嬉しかったです。

準備段階では、教育実習などで出演者全員が揃いにくく「果たして本当にうまくいくのか」という不安が募っていました。しかし、いざ本番を迎える時、緊張しながらも全員が楽しんで二回公演をやり遂げることができました。皆でこのコンサートで伝えたいことを話し合っ



と話し合っ
て気持ちを一つに
していくことが
でき、また、七夕
コンサートに関
わった全てのス
タッフとも力を
合わせて公演で
きたことは、今後
の活動のための
大きな励みにな
りました。
(今中百合・記)



終演後は出演者とスタッフで反省会

アウトリーチ実習報告

神戸女学院中学部



七月二日
(月) 本学講
堂にて、神戸
女学院中学部
一〜三年生対
象「経済、財
務についての
講義」等の勉
強会の合間に、

肩の力をぬいてゆったりとした時間を持つてるようにとの趣旨でコンサートが行われました。(ピアノ・今中百合／フルート・片岡朗子／ヴァイオリン・東瑛子)

リラクセスした空間を創り出すことを目標に、三十分のプログラムで「ほのぼのコンサート」と題し、G・キングスレイ《バロックホウダウン》、J・S・バッハ《主よ、人の望みの喜びよ》、E・エルガー《愛の挨拶》、G・フォーレ《シチリアーノ》、P・チャイコフスキー《バレエ「眠りの森の美女」よりワルツ》、R・ラヴランド／B・グラーム《あなたが力づけてくれるから You Raise Me Up》の六曲を演奏。ピアノ・フルート・ヴァイオリンの三重奏を中心に、フルート独奏（シチリアーノ）やヴァイオリン独奏（愛の挨拶）も織り交ぜて、編成に変化を加えました。また、身体をほぐすために曲に合わせて深い呼吸をするエクササイズをしてもらったり、楽器（フルート、ヴァイオリン）の説明を間に挟むなど、興味を持って楽しんでもらえるよう工夫しました。

開演直後は緊張のため堅くなってしまうましたが、生徒さん達の素直で積極的な反応を受けて徐々にペースをつかみ、最後まで気持ちを盛り上げていく事ができました。リラクセスした空間を創り出し、演出していくための音楽、コンサートのあり方を考え、実践する機会が持てたことはこれからのアウトリーチ活動に役立つ大きな経験になりました。(東瑛子・記)

演奏者ごお客様



十月二十日(土)

に行われる「子ども
のためのスペシャ
ル・コンサート」は、
神戸女学院大学音
楽学部非常勤講師
でコンサートによる

者の南出信一先生の企画による弦楽五重奏のコンサートです。クラシックのコンサートは堅苦しいものと思われがちですが、南出先生は普段からユニークなコンサートを企画、開催されています。どのようなコンセプトで演奏活動をされているのか、お話を伺いました。(中村公美・記)

中村 先生はご自身で『ライツ室内管弦楽団』を主宰されていますが、楽団を作ろうと思われたきっかけは何だったのでしょうか？



南出 基本はミュージカルを観た時のように、「楽しく、おもしろく、時には涙したり、怒ったり」人間の色々な感性にタッチできるコンサートをしたいという事で結成しました。一番

のポイントは、お客様と演奏者が同じ平面に存在する事です。当時注目を浴びていたアメリカの「オルフェウス室内管弦楽団」という指揮者のいない室内アンサンブルを目指して結成したのですが、やはり世界のトップクラスのメンバーの集団には色々な面で勝てないと身をもって体験しました。それならば、彼らのしていないジャンル(方向性)でお客様に楽しんで頂ける楽団を作ろうと思ったのです。

中村 そのような信念をお持ちになるきっかけがあったのでしょうか？

南出 やはり「慰問演奏」ですね。

阪神大震災の時、被災地に住むフリーの演奏家達と『リ・アンサンブル』という合奏団を結成し、約七十箇所の学校や公民館などの避難所に慰問演奏に行きました。その時、そういう状況下の人達に一番必要なものは「笑い」であると確信しました。「笑い」は気分を高揚させ、血行を良くし、脳を活性化します。その瞬間に痛ましい震災の事を忘れ、その時間が多くなればなるほど、前を見る活力が増すのだと思います。親しみやすい曲や楽しい話を聴いて頂いた後には、モーツァルトやバッハなどのクラシックの作品もじっくり聴いて下さいませ。

素晴らしい芸術作品だから静かに聴きなさいという感覚ではクラシック業界はいつまでたつても発展しま

せん。芸術は演奏者が一方的に与えるものではなく、聴いて下さった方の心に届いた時、あなたの演奏は芸術ですねと言って下さった時に初めて成立するものだと思います。

中村 そういったお考えで活動されているんですね。ちょっと変わった演奏会もされているようですが…。

南出 淡路島のサンシャインホールで定期的に行っている「普段着コンサート」があります。ホールの舞台ではなく客席(フラットスペース)で演奏しますが、お客様には入場料と引き換えにパイプ椅子をお渡しします。お客様はそのパイプ椅子を持ってご自分の好きな場所に席を決めて聞くのです。目の前に来られる方や、奏者の後ろに来られる方とありますが、奏者とお客様とが、同じ空間で同じ空気を共有する事が大切だと思います。

中村 そんな演奏会があったらクラシックも身近に感じる事ができませぬ！先生は「子どものためのコンサート」にも力を入れていらっしゃるようですが、そちらのお話も聞かせてください。

南出 十年位前から、年に二十回程の幼稚園・保育園でのコンサートを継続しています。そこで勉強させて頂いた事は、彼ら(園児)にそっぽを向かれた演奏家はもう一度自分のスタンスを

見直さなければヤバイという事です。彼らには何の利害関係も世間体も存在しません。大人は、社交辞令で、あくびをかみ殺して終わったらロボットのよう拍手をしてくれます。ですが、彼らは面白くないと感じた途端、海辺の岩肌群がるフナムシのように好き勝手にゴソゴソ…もうおしまいです。しかし、演奏家がしっかりとプログラムを吟味し、彼らが興味を持つ話や話し方を考え、良く磨き上げた作品を心をこめて演奏すれば、フナムシ君達は目を輝かせて背伸びをして聞き入ってくれます。

この、初めて生の演奏を聴く彼らに手抜き演奏をして「あー、つまらない！」なんて感想を抱かせたら、それは社保庁の年金問題に匹敵する程の悪影響を音楽業界に与えてしまう事になります。それは全て私たち演奏家の生活に反映してくるのです。



コックさんの衣装をつけて

「これまで、幼稚園だけでなく小学校から高校まで数多くの音楽鑑賞会を行いました。玩具のピアノを使ってのベートーヴェンのピアノ協奏曲や、台所用品を使つての「キッチン・コンサート」、様々な年齢層にあわせた「音楽

クイズ」、ヴァイオリン奏者が客席に乱入して演奏する「チャルダッシュ」や分数の小さな弦楽器を使って演奏する「僕は小さなヴァイオリン弾き」等、目にも楽しめる物を考え、修正しつつ、その一つ一つが進化を遂げていくように努めています。この少しパロディ的な要素の物をきつちりと演奏する事で、本当のクラシックを真剣に聴いてくれるようになるのです。



クラシック業界に活力を与えるには、子ども達にそっぽを向かれないように、彼らに「音楽会ってけっこう面白い」と思ってもらおう事が何より大切だと思っております。

中村 ありがとうございます！
それでは最後に、「音楽によるアウトリーチ」履修生や、同様の活動をしている若い演奏家にメッセージをお願いします。

南出 まず、月並みですが、一生懸命です。それが一番だと思います。しかし、ただ闇雲に一生懸命だけでもダメなものです。我々は芸術を目指していますが、芸術などという言葉は自分で語るものではありません。お客様に対する

サービスをいつも考えなければいけません。どんな演目をどんな順番で、どんな風にか、もちろんそのサービスの中に、レヴェルの高いよい演奏も含まれています。お客様の為に最善を尽くし創意工夫する事の積み重ねで、やがて、お客様の方から「芸術」の称号を頂ける日が来るのだと思います。有償無償の区別無く、与えられたお客様との演奏会の時間を素晴らしいものにする。その事が、後の自分の生活にも、この業界の未来をも左右すると信じています。手抜き物(者)は誰にも幸せには出来ません。

アウトリーチ海外通信

**南カリフォルニア大学むどりセンター主催
「コミュニティ・エンゲージメント」のための
講習会に参加して**

「音楽によるアウトリーチ」履修生

片岡 朗子

六月十六〜十八日、アメリカ合衆国の南カリフォルニア大学(ソニントン大学)にて開催された、ヴァイオリンスト・五嶋みどりさん主催のコミュニティ・エンゲージメント(Community Engagement)について学ぶセミナーに参加してきました。



セミナーはまず、コミュニティ・エンゲージメントとは何かという説明から始まりました。みどりさんが提唱するコミュニティ・エンゲージメントとは、アウトリーチ

活動のコンセプトをさらに推し進めたもので「提供者・受容者」という立場を越えて、関わる人間全てが積極的に参加し協力しあうことによって、人と社会・地域の結びつきを強め、お互いの意識や知識を高めあつていく活動を意味します。音楽の分野では、演奏家と社会が感動を共有し、音楽の素晴らしさを分かち合う活動となりま

と、必死にディスカッションに加わってました。
セミナーは三日間という短期間で、しかも三日目には実際に小学校でコンサートを行うというプログラムだったので、朝から晩まで一歩もホールの外に出ることなくともハードなスケジュールでした。
まず一日目は、子どもの能力を伸ばすことと音楽の関係性について、また舞台上立つ俳優としての立ち振る舞いの重要性についての講義や、



実際に音楽を使って体を動かすことなど、コンサートを行う中で音楽をどのように使えばより効果的かということを深く考え、話し合いました。

二日目は、各自のレパートリーを出し合い、その曲を使って何を伝えたいかという話を話し合い、実際に二、三人ずつのグループに分かれて合わせをして台詞を決め、そして通し稽古を行いました。

三日目には大学の近くにある Mack Elementary School にて小学三年生を対象としたコンサートと

小学校四年生を対象としたコンサートを各一回



ずつ行い、反省点を話し合いセミナーは終了しました。

このセミナーに参加して、次のようなことを学びました。

- 音楽は国や言葉を越えるコミュニケーションの手段の一つである。
- こちらから心を開けば、おのずと返ってくるものがある。目を見て、伝えようとするのが大切。
- 舞台の上、聴衆の前に立ったら不安や緊張が伴ったとしても一人の演者にならなければならない。
- 言葉だけがコミュニケーションの手段ではない。言葉も音楽も両方大事で、それぞれが相乗効果になる。

こういったことを、頭で理解するだけでなく実際に体感することができました。どれもシンプルで基本的な、聞けば頭では分かっているようなことばかりですが、再認識できた事はこれからの音楽に対する接し方を考え直すいい機会になりました。

ロンドン・シシフォト・オーケストラの デイスカヴァアリー・ファミリー・コンサート

視察報告

津上 智実

一、LSOデイスカヴァアリー・プログラム

六月十日(日)午後三時から、ロンドンのパービカン・ホールで、ロンドン・シシフォト・オーケストラ(LSO)のデイスカヴァアリー・ファミリー・コンサート「いざ、わくわ

くする冒険へ! Amazing Adventures」が行なわれました。

LSOは一九〇四年に創設された世界有数のオーケストラで、ロンドンのパービカン・センターを本拠地として活躍しています。日本にも度々演奏旅行をしていますので、ご存じの方も多いことでしょう。

LSOは地域での教育プログラムに力を入れていて、それが「LSOデイスカヴァアリー」です。「質の高さ、革新性、近づきやすさ、機会の平等 quality, innovation, access and equal opportunities」をモットーに一九九四年に始まったデイスカヴァアリー・プログラムは、地域のあらゆる人々に音楽と触れ合う機会を提供することをめざし、非常に広範なプログラムを実施しています。学校や病院での演奏はもちろん、高齢者施設や養護学校、幼稚園やコミュニティ・センター、さらには刑務所でもプログラムを展開しています。昨年、デイスカヴァアリー・プログラムに参加した人は三万二千五百五十八人に上り、そこにはファミリー・コンサートの来場者四千五百人に加えて、入院中の子どもたち五百二十五人、ガムラン音楽のセッションに参加した一千五百七人、LSOの演奏者と肩を並べてオーケストラの中で管打楽器を演奏した百五十人、同じく弦楽器を弾いた二十人、主席指揮者サ・コリン・デイヴィスの指揮のレッスンを受けて実際にLSOを振る機会を与えられた三人などが含まれます。二〇〇三年には近くの聖ルカ教会を外観はそのままだに、内部を近代的に改造してデイスカヴァアリー・プログラムの拠点としました。

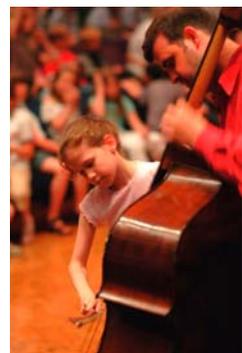
こうした多様なプログラムを企画・制作するために、LSOはイギリスの演奏団体として最大の地域教育部門を擁し、部門ディレクターの下、フルタイムのプロジェクト・マネジャー四人、プロジェクト・アシスタント三人(一人はパート・タイム)、二人はフル・タイムが働いています。この部門の年間予算は約六十万ポンド、日本円に換算しておよそ一億五千万円に上ります。

LSOデイスカヴァリーのファミリー・コンサートは五歳以上の子どもとその家族が対象で(五歳未満の子どものためには別の幼児用コンサートが平日の昼間に行われています)、年に三回、日曜日に開かれています。チケットは子ども(十六歳未満)が四ポンド(約千円)、大人が六ポンド(約千五百円)。大人はあくまで子どもの付き添いであつて、大人だけの入場はできません。

今回のファミリー・コンサートは、「いざ、わくわくする冒険へ! Amazing Adventures」と題され、LSOのホームページの告知には「すべての勇敢な旅人に告ぐ! 来れ、そして谷や山やジャングルを越えゆくLSOのわくわくする冒険に加わろう! Calling all intrepid travelers! Come and join the LSO for some Amazing Adventures through valleys, mountains and jungles!」とキャッチフレーズが踊り、「七歳から十二歳までの子どもたちにふさわしい」と明記されています。

では当日の様子を、具体的に順を追って見ていきましょう。

二、ファミリー・コンサート当日の様子



(C)Alberto Venzago

当日は午後三時からコンサートに先立って、午前(十時から十二時半まで)と午後(一時半から開演まで)に事前プログラムが設けられていました。午前は音楽および美術ワークショップ「魔法の音楽とコンサートに着ていく衣装を作る」、午後はロビーでの楽器体験(コントラバス、チェロ、子ども用の小さいガムラン一式、木琴類から小楽器まで)および聴衆参加曲の練習で、参加者は広いロビーのあちこちで思い思いに楽しんでいました。



(C)Alberto Venzago

聴衆参加曲は、デイズニーのミュージカル映画「メアリー・ポピンズ」でよく知られたシエルマン作曲「スーパーカリフラジリス テックエクスピアドゥーシャス」。楽器を持参するようホームページで呼びかけ

(<http://iso.co.uk/detail/eventinfo&showdetails?event&detailID=4141>)、楽譜もダウンロードできるようになりました

(<http://iso.co.uk/downloads/events/upload/4141-43.pdf>)。歌の人は全曲、楽器の人は後半のコーラス部分を演奏する形で、移調楽器のための楽譜も六種類(トランペット、テノール・サクソフォン、クラリネット用/低音の方が得意なクラリネット用)に一オクターブ下の楽譜/アルト・サクソフォン用/フレンチ・ホルン用/ヴィオラ用/バスーン、チエロ、コントラバス、トロンボーンとチューバ用のバス記号の楽譜が用意されていました。ホームページ上にはこの曲の録音と、手話によるヴァデオも用意され、事前に聞いた練習したりできるように、細やかな配慮がなされていて驚きました。

聴衆参加曲の練習は、別室に譜面台が用意されて、担当のお姉さんが音頭をとって進められました。ヴァイオリンやフルートはもちろん、チエロやサクソフォン、ホルンやチューバを持参した子どももいて壮観です。歌で参加する子、カスターネットや鈴といった小楽器で参加する子、アポリジニの民族楽器(クラップ・スティック)を持参した子もいました。

三時となりました。いよいよ開演です。指揮者が登場してまず第一曲、シヨスタコヴィッチ作曲の《ゴドフリー組曲》から第三曲(民衆の祭典)を演奏。曲は決して子ども向きではありませんが、わずか三分、オーケストラの威力と集中度の高い演奏に圧倒されている間に終わってしまいます。ファミリー・コンサートとは

え、音楽的なレベルでは妥協しないぞという姿勢が明確で清々しく、期待を高めてくれます。

第一曲が終わったところで語り(プレゼンター)のポール・リスマンが登場。客席に「こんにちは、皆さん!」と呼びかけた後、指揮者のフランソワ・グザヴィエ・ロスとオーケストラを紹介し、次に手話の通訳者二人を紹介し、左のアンジーがお話の通訳、そして右側のハンナが音楽の通訳をしてくれるよ。そして今日のコンサート「いざ、わくわくする冒険へ!」の趣旨を、魔法が出てきて、王子とオレんじとの恋と冒険の物語だよと紹介します。

第二曲はチャイコフスキーのバレエ音楽《くるみ割り人形》第二幕より、第十二曲(トレパック(ロシアの踊り))、第十四曲(ソ・ペイ糖の踊り)、そして第十二曲(チヨコレート(スペインの踊り))。ここではまずお菓子の映像(ステージ中央の上部に吊り下げされた大きなスクリーン一杯に、カラフルなゼリービーンズが映し出されます)で子どもたちの注意を引きつけた後、特徴的な音を出す楽器を紹介していきます。まず音を聞かせて、「これは何の音かな?」「そとうタンバリンだね」。すると映像でタンバリンが大写しになり、次に実際に奏者がタンバリンを奏する様子をカメラで写してスクリーンで見せます。こうしてチエレスト、バス・クラリネット、トランペットを紹介した上で、三曲を続けて演奏。カメラをうまく使い、要所要所で特徴的な音を出している楽器の演奏風景をスクリーンで見せていきます。

第三曲はグリーグ《ペールギュント組曲》第一番(山の王の広間に)。まず「こ

の曲にはたった一つの歌しかない、でも仕掛けが一杯あるんだ」と曲の特徴を説明した後、チエロとコントラバスでこの曲のテーマを聞かせます。次に「弦を普通に擦るのではなく、こらやと指で弾いて音を出すのを知っているかな?」と話しかけて会場から「ピツイイカート!」という奏法に関する答えを引き出します。さらに「この曲はほとんど速くなって、音がどんどん大きくなっていくんだ」と全曲の構成について見通しを持たせた上で、曲を実際に演奏します(この曲も三分!子どもが飽きない時間)。スクリーンには八つの丸い信号が縦に並び、曲が盛り上がるにつれて下から順に赤く点灯して、音楽の加速と加熱が視覚的に捉えられるよう工夫されています。

第四曲はプロコフィエフ《三つのオレんじの恋》「どうやつても笑わない王子がいて、王様は何とか王子を笑わせようとパーティーを開きます」と粗筋をごく簡単に語った後、第一曲(変わりものたち)に入ります。曲の途中で「パーティーの準備でみんな忙しい」とナレーションが入ります。「悪い魔法がやつてきて転んだら、緑の大きなパンツが丸見えになって王子が大笑い。魔法は怒って『おかしくなどない Not funny』と三回言い、『お前を呪ってやる Curse you』と四回言います。」ここで会場の子どもたちに「僕が手でこらやと合図したら『お前を呪ってやる Curse you』と言てね」と練習した後、第二曲《地獄の情景》を演奏。呪いのモチーフが四回ずつ出てくる箇所(全部で三カ所)で、子どもたちの大きな声がオーケストラの演奏に溶け合います。魔法の呪

いを解くために、世界一美しいオレんじを探しにしかける王子。その冒険が、第四曲《スケルツォ》、第六曲《逃走》、第五曲《王子と王女》とともに進みます。お姫様の名前はファンタヤとトロピカーナなど、子どもたちのよく知っているジュースの名前で、スクリーンには楽しいイラストが映し出されます。最後に演奏された第三曲(行進曲)では、聴衆も手拍子で演奏に参加しました。

次に聴衆参加曲のコーナー。事前にウェブ上で告知されていたシレルマン作曲「スーパーカリフラジリスティックエクスピアドゥーシヤス」を会場の子どもたちと舞台上のオーケストラで合奏しようというコーナーです。まずオーケストラの演奏で全体、つまりヴァース(歌)の部分とコーラスの部分を一度聞かせます。「今度は続けて三回、まずはゆつくり、次に普通の速さで、最後に速く演奏するので、みんなと一緒に歌ってください。楽器を用意してきた人はコーラスの部分と一緒に演奏してください」と説明して、いよいよ演奏に。嬉しいことに、プレゼンターのキネーが今ひとつ明確でなかったために、子どもたちの大半は結局弾かずじ終わってしまいました。事前にあれだけ練習していたのに、もったいないことです。

さらにここで質問コーナー。開演前に子どもたちに書いてもらった質問用紙から四つの質問が選ばれて、プレゼンターが質問を書いた子どもたちの名前と年齢を紹介した上で、演奏者にその質問をしていきます。

①コントラバスの楽譜はどんな音部記号を使っているの？一番高い音と一番低い音は？

(コントラバス奏者：「音記号だよ。普通は、上はレまでだけど、楽器によってはファ、ラ、ドまで出るものもある。下も普通はミまでだけど、ドやシまで出るものもある」)

②指揮者は年に何回くらいコンサートを
するの？

(指揮者：「あまり数えたことがないけど、八十回くらいかな」)

③オーケストラの人は指揮者をいつ見て
いるの？

(指揮者：「最初と最後、あとはあんまり見なくてもいいんだ」)

④今日演奏する中で一番好きな曲は？
(指揮者：「どの曲も好きだから選んだんだけども、中でも好きなのはこれから演奏するバルトークかな」)

第五曲はバルトーク作曲『二つの肖像』より第二曲(グロテスク)。「これは音楽で書いた絵だよ。手がかりの一つは『グロテスク』という名前。自分でストーリーを作りながら聴くことができるよ」と子どもたちに自分なりのイメージを膨らませて自由に聴くよう促します。こうなると子どもたちは好奇心の固まり、「えっ、じゃあ、どんな音が出てくるの？」と集中して演奏を催促する気配が会場に満ちます。曲は複雑で決して生易しくはありません。しかし強烈なイメージで、しかも二分。子どもたちの集中が途切れる間もなく終わります。

いよいよコンサートも終わり。ここで聴衆に「今日はありがとう」「そしてLSOに感謝」と謝意が述べられます。子どもたちと一緒に「ヨ、ヨ、家に帰る」のモティーフを一緒に唱えた上で、最終曲、ウィリアムズ作曲の映画音楽「ヨ、ヨ」より(地球への冒険)が演奏されて締め括ります。開演から五十五分、レヴェルの高い演奏とぎつしり中味の詰まったプログラムで、ずつしりとした充実感に満たされて会場を後にしました。

三、考えさせられたこと

実際にこのファミリィ・コンサートに参加して印象的だったのは、①楽器体験や関連のプログラムが開演前に設けられていたこと、②楽器を持参するようホームページで呼びかけ、楽譜もダウンロードできるようなっていたこと、③手話の通訳(言葉と音楽の二人)がついていたこと、④聴衆参加が多様な形で設けられていたこと、⑤映像の使い方が巧みなこと、の五点です。さらに、音楽的なレヴェルの高さ(選曲と演奏の両面)と、プログラムが音楽の中味に踏み込む優れた内容であったことが、このファミリィ・コンサートを満足度の高いものとしていました。

音楽の手話通訳は、私には初めてでしたが、LSOでは聴覚障害のある人々との音楽セッションも積極的に行なっている様子です。演奏を聞きながら通訳していくので、実際の演奏より若干遅れる場面もありましたが、音楽の動的な変化、旋律や強弱の高まり、テンポの変化、特

微的なリズムの刻み、主立つて活躍する楽器の様子(ラップを吹いたり、弦楽器を弾いたり、打楽器を叩いたり、ハーブをポロンポロンなど)を生き生きと体(主に両手と顔、そして上半身)で表現してくれまます。これがすべての演奏曲についていました。



(C)Alberto Venzago

これを見て、聴覚障害者に音楽を届け、楽しんでもらうという発想が自分の中になかったことに気付かされてしまった。これまで、神戸女学院の子どもたちのコンサートにそのための準備をしたことはありません。音楽は耳で聞かなくてもという理解に縛られて、知らず知らずの内に聴覚障害者を聴衆の範疇から閉め出していたのです。アウトリーチのコンサートでのレヴェルは、企画側がどこまで高い視点を持てるかによって決まると改めて感じさせられました。

このコンサートが優れているのは、お話や聴衆参加が音楽の内容に踏み込む形で考えられていて、楽しく聞いたり体を使ったりしている内に、音楽の構成や特

徴がよく分かるようになっていく点です。例えば、「お前を呪つてやる」のモティーフを一緒に叫ぶことで、子どもたちは複雑なオーケストラ曲の中に埋め込まれた短いモティーフに注意を向け、それが言葉と結びつくこと、また繰り返し出てくることを発見します。パールギェントの主要主題を最初に取り出して聞かせたり、曲がひたすら盛り上がりつついくのをランプの点灯で視覚的に示したり、というのも音楽の構成をよく分かってもらうための工夫です。

今回のファミリィ・コンサートの隠れたテーマは、どこにも記されてはいませんが、標題音楽であると理解しました。お話と音楽の結びつきについて、チャイコフスキーやプロコフィエフなどのさまざまな例を聞かせた後で、最後に自分でお話を作りながら聞いてもらい子どもたちの想像力を(一定の方向に囲い込むのではなく)自由に解放してやることまで、非常に丁寧にケアされています。ここまでよく考え込まれたプログラムに接したのは初めてで、LSOのエデュケーション・プログラムの底力に感服しました。

なお、プレゼンターのポール・リスマンはスコットランド出身の作曲家、特に子どものための音楽を書くスペシャリストであり、また教育アニマトゥール(推進者)としてヨーロッパ各地およびアメリカで活躍しています。今年、ルクセンブルク・フィルハーモニーの教育部門のディレクターに就任したとのこと。このような人材が日本でもぜひ育つてほしいと強く感じました。

子どものためのスペシャル・コンサート
5つの弦楽器&ピアノのゆかいな音楽会

日時：2007年10月20日(土)14時開演
場所：神戸女学院講堂
入場料：大人1,000円
子ども(小学生～19歳)500円

ヴァイオリン 釋 伸司、菊本恭子
ヴィオラ 高村明代
チェロ 雨田一孝
コントラバス 南出信一
ピアノ 佐々由佳里

～お申し込み方法～

往復ハガキに、①お子様の学年と人数②大人の人数③住所④代表者の氏名⑤電話番号、返信面の宛先を明記の上、アウトリーチ・センター(下記お問合せ先)まで10月4日(木)必着でお申し込みください。
往復ハガキのみの受付になります。



♪ 今後の予定 ♪

◎ アウトリーチ

9月11日(火)
大阪府立成人病センター

9月13日(木)
神戸市立中央市民病院

9月19日(水)
兵庫中央病院

11月14日(水)
神戸市立中央市民病院

12月12日(水)
西宮市立浜甲子園幼稚園

◎ 子どものためのコンサート・シリーズ

10月20日(土)
第18回「子どものためのスペシャル・コンサート」

12月8日(土)
第19回「子どものためのクリスマス・コンサート」

◎ 講演会・ワークショップ

11月15日(木)～23日(金)
ショーン・グレゴリー先生
(ロンドン・ギルドホール音楽院)ワークショップ

11月30日(金)
仲道郁代氏 講演会とディスカッション

♪ 音楽をお届けします ♪

「音楽によるアウトリーチ」

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。
大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場ですてきな音楽のプログラムをお届けします。

♪ 小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、
子どものための楽しい体験学習を！

♪ 病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽
プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター
〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL&FAX: 0798-51-8584
E-mail: outreach@mail.kobe-c.ac.jp http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/

----- 編集後記 -----

七夕コンサート無事終了。3時間立ちっぱなし×2回ができた自分の集中力に驚きです。(井本)
祝・七夕コンサート終了！これからのアウトリーチもがんばりましょう！(寺澤)
これからも楽しいアウトリーチ通信目指してがんばります！今号は「インタビュー」にご注目！！(中村)
七夕コンサート…2年前は出演者。今年は運営スタッフ。2年後は…。(南)
盛りだくさんな行事にワクワク、これからもみなさんと一緒に頑張ります！(三上)
一年半、どうもありがとうございました。これからもよろしく！！(絹田)
お陰様でふえてきた演奏の機会、一つ一つをどこまで大切にできるかが課題です。(津上)